

特集

大切なものを 守るために

「助かる命」を見逃さない町になろう

その家に火の手が上がったのは、辺り一帯が寝静まった午前3時20分のことだった。火災発生時に気付く者はおらず、炎はみるみる大きくなった。木造の住宅は、瞬く間に炎に包まれていった。

木造2階建て住宅と、隣接する母屋（木造平屋建て）など3棟が全焼。焼け跡からは若い女性の遺体が見つかった。所轄の消防署によれば、この一家は、父、母、祖母、娘の4人暮らし。当時4人は就寝中。「バチバチ」という火がはぜる音に気付いた母が119番したという。消防が到着した時には既に火は燃え広がり、手の施しようがなかったという。出火元は1階。2階で寝ていた娘さんが、逃げ遅れたのではと見られている。

深夜に起きたこの火災。住人が寝静まっている時間帯なのに、なぜ火災が起きてしまうのだろうか。島田市消防本部に尋ねた。「この時間帯の火災は、たばこの不始末などでよく見られます。布団や畳、じゅうたんなどに落ちた火種は、すぐに燃え広がるわけではありません。しばらくの間くすぶりながら、じわじわと広がっていきます。やがて室内に煙やガスがたまり、徐々に室内温度が高くなります。ある一定の温度に達したとき、室内に充満したガスが発火。火は一気に大きくなる

のです。これは典型的なフラッシュオーバーと呼ばれる現象です。当管内の事例では、夜8時ごろに吸ったたばこの不始末が原因で、深夜1時に火災が起こったというケースもありました。住人が忘れたところに火災は発生します。まして就寝中であれば、誰も気付かないうちに、火は大きくなってしまいます」。

早い段階で気付けば、きっと消火もできた。逃げ出すこともできた。この家の娘さんは助かったかもしれない。命を失わずに済んだかもしれない。でも、もう帰っては来ない。家族の元にも、愛する人の元にも…。

日本国内で、住宅火災によって亡くなる人の数は、年間1,000人以上にのぼる。そしてその数は、近年増加傾向にある。

無くしたい。火災によって失う命も、それを悲しむ人たちも…。

そのために、

住宅用火災警報器が、ある。

それは「命の見張り番」。
あなたの家にも、今すぐに。